

令和5年度8020公募研究事業
研究報告書抄録（採択番号 23-5-12）

研究課題：高齢者における唾液分泌量の実態調査および唾液分泌と咬合状態に関する研究

研究者名：新明桃¹⁾，小林利彰¹⁾，鬼木隆行¹⁾，田崎雅和²⁾

所属：¹⁾ 公益財団法人ライオン歯科衛生研究所，²⁾ 東京歯科大学

【目的】本研究は，下記の2つを目的とする。

- ①一般歯科に来院する高齢者の刺激唾液量の実態把握
- ②アイヒナー分類による咬合支持域の数が多いほど適切な咬合が獲得されるため刺激唾液量が多いという仮説の立証

【方法】3 歯科医院の来院患者のうち，本研究に同意が得られた 40-90 代の 176 名(男性 81 名，女性 95 名，平均年齢:73.4±9.4 歳)を対象とした。問診にて年齢，性別，全身疾患，服薬の状況を確認後，歯式を記録した。ここで，サリバーガム α (東京歯材社)を3 分間咀嚼した時の総唾液量(g)を刺激唾液量とした。①において，年齢，性別，全身疾患，服薬の有無と刺激唾液量の関係について解析した。②において，アイヒナー分類(咬合支持域を A,B,C の3 群に分類)で咬合状態を層別し，刺激唾液量との関係を解析した。

【結果と考察】

①高齢者における刺激唾液量の実態は，性別による違いがみられ実年齢においても性差があった。全身疾患，服薬の有無と刺激唾液量に関しては，あり群はなし群より有意に少なかった。

②-1)アイヒナー分類による咬合状態と刺激唾液量

B 群と C 群は，A 群より刺激唾液量が有意に少なかった(A 群：3.43g, 68 名，B 群:2.54g, 76 名，C 群：2.34g, 32 名，計 176 名，AB, AC 間 $p < 0.05$)。

②-2) 口渇の副作用を有する薬剤の影響を考慮した際のアイヒナー分類による咬合状態と刺激唾液量

口渇の副作用を有する薬剤と刺激唾液量の関係において，口渇の副作用を有する薬剤を服用している群(以下，副作用あり群)は，副作用なし群(服薬なしを含む)より刺激唾液量が有意に少なかった(副作用あり群:1.97g, 51 名，副作用なし群:3.29g, 125 名，計 176 名， $p < 0.01$)。そこで，副作用なし群のアイヒナー分類をみると，B 群は A 群より刺激唾液量が有意に少なかった(A 群:4.13g, 53 名，B 群:2.60g, 54 名，C 群:3.33g, 18 名，計 125 名，AB 間 $p < 0.05$)。

咬合状態と刺激唾液量との関係は，A 群に比べ B 群，C 群の方が刺激唾液量は少なかった。さらに口渇の副作用を有する薬剤を除外した場合においても，A 群から B 群へと歯の咬合支持域の減少に伴い刺激唾液量も減少した。以上のことから，自身の歯での咬合維持が刺激唾液分泌に影響を与える可能性が推測された。なお，C 群に有意差が認められなかったことは，C 群の対象者数が少ないことが考えられるため，引き続き対象者数を増やして検証していく。

【結論】本研究は，高齢者における刺激唾液量に関する実態把握並びに，アイヒナー分類と刺激唾液量に関する仮説を立証できる可能性を見出した。